Nobody's Perfect（NP）プログラム　NPファシリテーターだより　34

地域のお母さんにNPを

― 子育て支援室での実施 ―

NPファシリテーター（大阪市旭区）　**大内 道子**

参加者の思いを忘れずに

私は大阪市旭区保健福祉センター子育て支援室で家庭児童相談員をしています。非常勤職員である私が、NPを職場に持ち込み仕事として実施できるとは夢にも思ってなかった、と初めに正直に書いておきます。ファシリテーター養成講座を受けたこと、1回目の実施、そして子育て支援室の仕事としての3回の実施、それぞれに運の良い出会いがあり、私はただただ眼の前のことを無我夢中でこなしてきたように思います。そんな主体性に欠ける私の実践の中にも、みなさまのNP実施に役立つことがあればと祈りつつ報告をさせていただきます。

まずは1年の流れを追って現況を報告します。

参加者募集は、公募とアウトリーチを組み合わせています。公募は、5月ごろから1歳半・3歳健診でのチラシ配布、9月区広報紙への掲載、同時期公共機関へチラシ設置をしています。それにアウトリーチ：子育て支援室からの声かけが加わります。こども相談担当係長（保育士）や家庭児童相談員が関わるケースへの声かけです。保健師からの紹介でお誘いすることもあります。

アウトリーチはNPを必要としている親子をピンポイントでつなぐことのできる貴重な機会です。ただ、子育て不安を前面に押し出して声をかけているわけではないにも関わらず、アウトリーチで参加した人の中には「だめな母と言われているような気がした」「このようなグループには深刻な問題を抱えている人が紹介されると思い、参加に迷いがあった」等、最終回になって打ち明ける人もおられます、そういう思いを越えて参加したお母さん達を迎えるんだということを、実施者は忘れてはいけないと感じています。

保育のしくみ作りと工夫

10月に入ると事前聞き取り、11月～12月でプログラム実施、3月フォローアップというのがおおまかな流れです。旭区での実施は子育て支援室と区社会福祉協議会との共催です。プログラム第1回目に間に合うよう、区社会福祉協議会では保育ボランティア養成講座が開かれ、その年の思いも新たな卒業生が主となってNP保育を支えて下さっています。特に昨年度は、NP保育を講座の実践の場と明確に位置づけて頂くことで、ボランティアさんに毎回確実に入って頂けるようになりました。そこに子育て支援室から2名のスタッフと区社協の講座担当者が加わり、毎回ほぼ固定メンバーでの保育を提供する事ができました。ボランティアさんは無償です。大泣きしたり固まってしまう子どもに辛抱強く寄り添って、信頼関係を築いて下さる姿には本当に頭が下がります。毎回こども相談担当係長（保育士）を中心にその日の保育について振り返りをし、何かを得て帰っていただけるよう努めています。信頼できる大人が見守る場で毎週1回、決まったお友だちとじっくり遊びこむ、この経験は子どもたちにとっても貴重な機会になるはずです。

また保育の中で見えた子どもの姿を母へ返す、ということを昨年度初めて試みました。もちろんその日その日の子どもの様子は保育スタッフからお母さんに伝えています。それに加えて毎回の記録をまとめ、カードを作ってフォローアップの日に一人一人お渡ししました。子どものよいところ、力の感じられるところ、プログラム中に変化が見えたところをお伝えして、少しでもお母さんが子どもを理解したり受け止める力になればと願いをこめました。

プログラムと個別対応の間で

ファシリテーターは外部から迎えた講師1名と家庭児童相談員である私です。日ごろ、主に子どもの発達のことで地域の親子に関わる私がファシリテーターとして入るメリットとデメリットは感じています。中には、NPで人に話す良さを初めて感じたと個別相談に来られる方がいたり、NPを始めいろいろな講座と個別相談とを行ったり来たりしながら何年もかけて親として成長していかれる方もいて、その道のりを一緒に味わえるのはこの仕事の醍醐味の一つでもあります。一方で、知っている相談員がNPの場に居ることで母に気を使わせているんじゃないか、思うことを全部話せていないんじゃないかと思う時があります。またプログラム終了後、お母さんたちがつかず離れず緩やかに結びつく年もあれば、がっちりグループを作られる年もあり、特にそういう年には個別に関わるお母さんからトラブルが聞こえてきたりします。そんな時、プログラム後はファシリテーターとは別の人間が個別に関わる方がよいのでは感じることもあります。プログラム・個別面接両方の独立性がそがれるように感じるのです。一度、参加者募集や会場設営など自分は事務局に徹して、よそからの講師を2名お願いしてみたらどうだろうと想像してみるのですが、今のところ予算という現実に阻まれています。

あんなファシリテーターになりたい

仕事としてのＮＰは３年かけてこのように整ってきたわけですが、それ以前のファシリテーター養成講座と、ファシリテーターとして認めて頂くための第１回目実施についてお話しします。

何の知識もなく人に誘われて参加した養成講座は、本当に楽しいものでした。自分の子育て時にこんなグループ体験があったらどんなに良かったでしょう。何だか安心して笑ったり作業しているうちに、目の前がぱっと開ける瞬間があるのです。その時について下さったトレーナーが、個々の発言を本当に大切に扱って適確に返して下さることにも感激しました。あんなファシリテーターになりたいと願いつつなかなか修行は実りません。が、この時の楽しさ・爽快感が、お母さん方にＮＰを勧める原動力となっています。

さて、講座は受講したものの、何をどうしたら実施にこぎつけられるのかさっぱり見当がつきません。皆さんはどうされているのだろうと参加してみた研修会でも参考になるお話はなく、しょんぼり帰宅した私はしかしKKI から思わぬ電話を頂いたのです。その日の研修会に参加した中に共同ファシリテーターを探している方がいらっしゃったとのこと。さっそく紹介して頂き、お互いのケースを持ち寄るようにして１回目を実施したのでした。交通費も含め完全な無償でした。セッション計画は、毎回トレーナーにアドバイスして頂いて完成させるのですが、あって無きが如し、お母さんたちの勢いに原型を留めないほどかき回されたり、逆に思わぬ膨らませ方をしてくれて盛り上がったり。時間の管理もままならず、アンケートには「ファシリテーターの方は数をこなせば上手になると思います」と書いてもらった思い出深い実施です。

多くの人の協力があって

その後「これはやはり子育て支援室の仕事だ」と思った私は、回りの職員や区担当の児相ワーカーに聞き回り始めます。が良いアイデアは無く、またまたあきらめの時期が続きました。そんな中、今思えば当たり前のことなのですが、「それは直属の上司にもちかけるべきだ」と言葉にしてくれた職員がいて、それを聞いた相方相談員が上司に説明に行ってくれるということが起こりました。それに動かされた上司が区長にかけ合い、区社会福祉協議会にかけ合い、必要な環境を整えてくれて、私自身は茫然とする中･･･ 仕事としてのＮＰが始まることになったのです。

参加者募集の方法や共同ファシリテーター、保育スタッフなどまだまだ問題はありましたが、何より子育て支援室のメンバーがこれは必要なことだと認め快く動いてくれたことが大きな力となりました。当時のこども相談担当係長の「前からこういうプログラムが地域に必要だと思っていた」と言う言葉、この係長と相方相談員とが保育に毎回参加してくれたこと、第１回目は特に保育スタッフが不足気味で、仕事をやり繰りして駆けつけてくれた子育て支援室以外の職員、感謝する事ばかりです。共同ファシリテーターには、いろいろな場面でファシリテーター経験が豊富で虐待にも詳しい友人に来てもらうことができました。本来の仕事を休み時間を割いてくれた彼女にも感謝、そして彼女のファシリテーションに間近で触れて、私はまた多くを学ぶことになりました。

子育て支援室は、18歳までの子どもと親の様々な相談に応じています。どうしても個別の支援を必要とする親子に目が行ってしまい、突出した問題を抱える訳ではないお母さんを対象に子育て支援室がプログラムを実施する意味があるのかと悩み、何とか保健師と連携しなきゃと焦りが嵩じた時期もありました。しかし大きな組織の中で新しい流れを提案するのは、現実には難しいことが多くあります。今も個人の思い・好意に依って動いている部分が多く、また正規職員には必ず異動がついて回るなか、いつまでこの人手の要るＮＰを実施できるのかと不安も感じます。

感度が肝心

「悩んでいるのは自分だけじゃないと知って気が楽になった」「子どもに笑顔で接する時間が増えた」「自分をほめてあげられるようになった。子どももほめてあげられるようになった」「聞いてもらうだけ、聞くだけで気づくことが多かったです」お母さんたちの最後の言葉は、仲間を得た喜びであり、子どもを受け止める覚悟であり、未来への夢です。その後ろに透けて見えるのは、人の評価を気にして失格なのか合格なのかと二極化してとらえ、他と違うことを恐れるしんどい心のあり方です。ＮＰのあった日は、時期を待とう大丈夫、叱らないでおこうと明るい気持ちで帰るのに、１週間の内にそれがすっかり戻ってしまうと嘆いておられたお母さんがいました。ＮＰを８回終え今は気づきや変化を確信していても、日常を重ねるとやはりしんどいところへ戻ってしまうのかもしれない。それでも、ここで話し聞いたことがわずかでも力に、幸せにつながっているようにと願わずにはいられません。

そしてようやく私にもお母さんたちのことばが満ちたのか、子育て支援室がＮＰを実施する意味は確かにあり、肝心なのはこちらの感度だと思えるようになりました。毎年公募で来られたお母さんの中に、かなりしんどいなと思える方がいらっしゃるのも事実です。もともとＮＰは個別支援を必要とする親子には向かないプログラムだと位置づけられています。それでもこの場でＮＰを実施することの意味、そしてどうしたら本当にＮＰの必要な人に情報が届き参加してもらえるのかを自分に問いかけながら、これからも地道にＮＰを実施していければと思っています。